



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 地域の視点を持つ「よそ者」として                                                                  |
| Author(s)        | 敷田, 麻実                                                                            |
| Description      | 石川版朝刊10版27面掲載、金沢アンダンテ                                                             |
| Citation         | 朝日新聞                                                                              |
| Issue Date       | 2003-08-13                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/34969">https://hdl.handle.net/2115/34969</a> |
| Rights           | 本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載することを禁じます。承諾番号25-2832             |
| Type             | article                                                                           |
| File Information | 1285.pdf                                                                          |



敷田 麻実

⑤

地域の視点を持つ  
「よそ者」として

金沢のよそ者

題字は五木寛之氏

1998年春、15年間勤めた県を退職し、大学の仕事に移った。もっとも、県

があるから、海であり得る。その視点を持てたのだから、私にとっては意味のある幸せな転職であったと思う。

15年間同じ場所に勤めて、初めて変化を経験したが、「転ずる」ということは、ある意味では未知の世界へ足を入れることだ。その

ドン・キホーテのような「トリックスター」に思えるが、彼らは厄介者ばかりではない。価値ある知識や知恵を持つ人もまた流れてくる。地域の中でその人を生かすことができれば、そこに可能性が宿る。

実は、よそ者とは「他者のまなざし」を持つ人で

# 開放的な閉鎖性を

職員時代に自分の時間に研究していたことが仕事になった。ある意味で、海は漁業でだし、沿岸域管理という分野は、水産の仕事とま

れはまさに「よそ者」の気分だった。よそ者は、普通はよそから地域を訪れる旅の人であり、漂泊の民、ノマドとも呼ばれるが、私はこうした人々に強い関心を持っている。

地域にない発想や視点を持つので、よそ者は一見、

しかし、県職員時代から今の仕事に変わって一番大

が、海を使う人々がい

いいのではなく、海環境

で、海を使う人々がい



にある。地域をオープンにしなが、それでいて地

海岸に漂着するペットボトルなどのゴミ問題に取り組む、国内外の研究者や活動家と連携を続けている川賀市で

が、多くのよそ者を惹きつける。実際、よそ者と協働するまちづくりに長けているところは、都市に近いとか、自由な風土があるとかではなく、開放的な閉鎖性を持つ地域が多い。

また、地域にいなからよそ者の視点を持つ優れた人は石川にも多い。よそ者は必ず地域の外から来るわけではなく、私が「地域内よそ者」とよぶキーパーソンも多々いる。地域は、そのようなよそ者を許容できる余裕を持つことが大切だろう。

(金沢工業大学教授)